

## あとがき

私の第2の人生は、環境教育学を確立するという義務を優先し、教育実践研究に多くの時間をかけた。雑草や雑穀の調査研究・実験は、趣味という位置づけだった。義務と趣味によって、私生活は経済的にも時間的にも、さらに精神的にも甚だしく犠牲にした。自分の家族の世話をしないで、他家の子どもたちのお世話に時間をかけた。「アンパンマンの正義は、自己犠牲だ。自己犠牲を伴わない正義はない」と、やなせたかしは言っている。自己の信条や信仰に従うとはそのことであろう。すべては自己の内にあり、足るを知ることなのだろう。第3の人生では義務はほとんどなく、さらに自由になり、趣味と家族に暮らしている。人生に何の恨みも残さず、足るを知って彼岸に行くことだと思うので、今は調査研究などのアーカイヴズ作り、すなわち売らない文筆作業、3家族分の有機無農薬の食料作り、刺繍など、趣味の仕事に勤しんでいる。

第9号の特集は、主にインド亜大陸の雑穀についてである。本来、雑草の進化研究を志したが、老師阪本寧男の誘導により、雑穀研究にも憑りつかれてしまった。初めは文化人類学の野外調査程度だったが、次第に深間にはまり、キビの起源と伝播の研究を進めることになった。インド亜大陸調査では、優秀な隊員たちとの研究分担のバランスで、食文化を主な対象とした。ところが、畏友小林央往が、西アフリカの野外調査で、マラリアに斃れた。インドと一緒に調査旅行を繰り返した親友の志を継ぎ、インド起源の雑穀の研究を追加することにした。彼の卓見に導かれながらも、能力不足で、十分な成果を挙げられたとは思えない。

この特集の拙い論文は、定年退職を間近に控えながら、国際誌に投稿する努力によって生まれたものである。残念ながら受理されるまで、あるいは投稿するまでには及ばなかった。しかし、第2の人生において膨大な労力を費やし、拙いとはいえ、二度と余人がなせる仕事量ではないので、残しておくべき研究成果であると考えた。また、小林の遺志であるとも思った。トルストイが言っているように、人はいずれ死を遁れられず、仕事は忘れ去られて行く。しかし、内村鑑三が言ったように、小さな個人の最大遺産としての「人生」ではある。「読む人知らず」であっても、第3の人生の足るを知るために書いておきたい。

木俣美樹男